

仏とは、この自我を照らし破る智慧・慈悲のはたらき

新しい年を迎え心機一転といきたいところではありますが、私自身の心を覗いてみますと、ただただ生を偷（ぬす）んでおるだけだなーと、なにかしらん心弱い、あさましい気持ちになっております。「生を偷む」とは、死ぬべき命を生きながらえる、恥を忍んで生をむさぼるという意味です。なんやかんやと言いながら、徹底的にこの自己の身の保全のために生きているのではないかと感ぜられるのであります。

親鸞聖人が晩年に作られました歌に次のようなものがあります。

「是非しらず邪正（じゃしょう）もわかぬ このみなり

小慈小悲もなけれども 名利（みょうり）に人師（にんし）をこのむなり」
意味は、物事の是非も知らず邪正も解らない愚かなわが身である。小さい慈悲さえもないけれども、名聞利養のために人の師となることを好んでいる。

（親鸞和讃集 岩波文庫P. 215参照）

自分を徹底して厳しく見つめられた親鸞聖人の自分をごまかさない自己内観、告白の態度にただただ驚き感銘を深くしますが、これは正に私自身のことが言い当てられております。

そして、こういう歌がございます。

「無慚無愧（むざんむき）のこの身にて まことのころはなけれども

弥陀の回向（えこう）の御名（みな）なれば 功德は十方にみちたまう」
恥知らずのわが身であり、真実の心のないあさましい凡夫であるけれども、仏の真実心からたまわる名号、「南無阿弥陀仏」であるから、その功德はわが身に満つるばかりでなく、自ら十方に満ちわたりたもう。

（親鸞和讃集 岩波文庫P. 202参照）

ただただ生を偷むしかない身でありますけれども、そういう私を見通して四六時中悲しんでおられるのが仏というものであり、自分ではそう生きていくしかできない私に、ただわが願いに気づいてわが名を称えてくれーとたのんでいらっしゃるのです。わが名とは「南無阿弥陀仏」というお声でありまして、仏つまり、智慧・慈悲のはたらきそのものが、私をして「南無阿弥陀仏」と称えしめるのであります。そこにおきまして、この「生を偷む」しかない私が、そ

のままで全く安心を得て前進せしめられるのであります。

仏の教説は八万四千の法門と呼ばれますほど沢山の教えがありますが、私は浄土教の中の法然上人・親鸞聖人のお流れの教えに出会い、そしてそのお育てを蒙っております。その教えの中身は何かと申しますと、「この私というどうしようもないあさましいやつが、徹頭徹尾、全く仏力・他力でそのまま仏の名を信じ称えるようになり、不思議と安心を得て、この苦しみに満ちた娑婆世界を生きそして死んでいけるようになる」ということであります。

仏の名を信じ称えるということは、「南無阿弥陀仏」とお念仏申すことであります。これはいつでもどこでも誰でもできることです。お念仏申すことは易いことでありますが、しかし、お念仏一つで「間違いなく自分は助かった」という自覚を持てることはとても難しいことであります。それはなぜかと申しますと、まず以って私どもは自分のことをそれほどあさましい人間だとは思えないからであります。自分のことは何でも自分の力、良識でもって何とかやっけていける、切り開いていけると大体思っていますね。つまり自己を頼む根性を有しているのです。私自身も、若いときからそういう根性でやってきておりますが、と同時に仏の教えが段々と聞こえてくるようになり、今まで見えなかった自分の自我中心性といいますか、名利を求める心、他人を差別し貶める心、人に見てもらいたいええところは見せない振りして見せて、見られたくない穢いところは隠して等々、もう染み付いて決してなくすことができないあさましい根性の持ち主なんやなーと見えてきたのであります。

自分の努力で以ってこういうあさましい根性が無くせればいいのですが、それがそうはいかない、つまり自力ではなんともならん煩惱具足の凡夫（ぼんぶ）であるなーということがいよいよ見えてきたのであります。そういう穢い身であるという自覚が芽生えてきましたのと同時に、そもそもそういう私という存在を存在たらしめている無量のはたらきに心の目が開かされてまいりました。穢いもくそも無い、そういう分別以前の本来そもそもこうして私が存在していること自身が全くの無量の因と縁とのはたらきがこうなっておる。この私を含めてすべてのものをそのものたらしめている空間的にも時間的にも無量・無限のはたらきをインドの言葉で Amita というのであります、それが漢字で「阿弥陀」と表現されているのであります。

それでは、その「南無阿弥陀仏」一つで心が救われるということはどういうことでありましょうか。分別をすればどうしようもない穢いあさましい我とい

うものを内観せしめられますが、その自力で以ってしてはしようもない我が、人間の頭では到底思議し尽くせない無量のはたらき、つまり Amita (阿弥陀) に「南無」することであります。「南無」とは無量・無限の広大なるいのちのはたらき (他力・仏力) に気づかされて、今までの「自分が自分の力で生きていたんだという自力心」が自然に捨て果てられて、阿弥陀つまり無量の他力・仏力が自分というものになっておるんだーと根本的・徹底的にうなづくことでもあります。ここにおいて、罪悪の身のまま、あさましい身のまま、「南無阿弥陀仏」と全くの安心を得て進んでいける心力を得るのであります。

仏とはかように、この自我を照らし煩悩具足の「悪人の自覚」を生ぜしむる智慧としてはたらき、そして、そういう狭い自我を破って広大無限なるいのちのはたらきがこの自分というものになっているんだーという、心の目を開かせる慈悲のはたらきを申すのではないかと頂いております。私らはその仏のはたらきに真に出会って、この苦しみに満ちた娑婆世界を安心して生きてゆき、そして死んでいけるところの心の世界といいますか、自分がどこで何をしておろうとも、いつでも他力・仏力の掌中にあるんだという心力の所有者にならしめられるのであると思います。

合掌

(ご感想・ご質問を mikinakura87@gmail.com 迄どうぞ)